

第 29 回火山噴火予知連絡会 議事録関連資料追記

10月3日三宅島噴火後、下鶴会長は幹事とはかり、三宅島噴火について統一見解並びに会長コメントを発表したが、その内容は次のとおりである。

昭和58年(1983年)年三宅島噴火についての統一見解

昭和58年10月4日
火山噴火予知連絡会

三宅島は10月3日午後3時30分ころ噴火した。噴火地点は雄山の南西斜面から南南西にいたる割れ目より溶岩を噴出し、溶岩流は3方向に流れ、更に南にある新鼻付近で海底から水蒸気爆発を起こした。これら一連の噴火活動により大量の火山灰が東方に積った。

火山活動は4日午後7時現在、一時盛んだった溶岩の噴出活動は弱まり、有感地震は1時間あたり1～2回と小康状態が続いている。

しかし、昭和15年の噴火の際は、山腹噴火が終ったあと雄山山頂から噴火したこともあるので、地震活動の監視を含め引き続き警戒する必要がある。

昭和58年(1983年)三宅島噴火について会長コメント

昭和58年10月9日
16時15分
火山噴火予知連絡会

観測班による現在までの調査結果によれば、10月3日15時30分ころ噴火した三宅島雄山南西山腹海拔500メートル付近より南西に走る割れ目多数点から流動性に富む溶岩が噴出し、主流は阿古及び粟辺方向に流れ一部は海に達した。さらに、新霈池新鼻付近ではマグマ水蒸気爆発を起こし、そのため坪田周辺では降灰が12センチメートル以上に達した。噴出物調査によれば、流出した溶岩の総量は約700万 m^3 降下した火山灰等の総量は約500万 m^3 である。

溶岩の噴出は10月4日午前中にほぼ止まったものと推定される。気象庁の観測によれば、今回の噴火に伴う地震の活動は10月3日のマグニチュード6.1の地震の発生以降有感地震の回数は急速に減少しつ

つある。

気象庁及び観測班によって増強された地震観測の結果、地震は島内南西部の二男山付近を中心とした浅い部分に発生していることが推定された。また、雄山山頂には新しい熱異常地域もなく、噴気温度にはほとんど変化はない。三宅島南西方面への溶岩流出と新瀞池付近を中心とするマグマ水蒸気爆発を伴う一連の噴火活動は一応治まったが、有感地震を含めた地震活動及び雄山山頂等の火山活動について、なお監視を続ける必要がある。なお、南部海岸付近の噴気地帯からは毒性の強い高濃度の塩化水素ガスの噴出が認められ、また、新瀞池火口壁周辺は崩壊が予想されるので注意を要する。

昭和58年(1983年)年三宅島噴火について(統一見解)

昭和58年10月11日
午後4時
火山噴火予知連絡会

10月3日噴火した三宅島は、10月4日午前中に溶岩の流出はほぼ止まった。

溶岩及び火山灰等の噴出物総量は約1200万 m^3 である。観測班による地震観測結果によれば、地震は最初の噴火が発生したとみられる二男山付近を中心とする浅い部分に起きている。

現在、雄山山頂には熱異常はない。有感地震は10月6日朝以降起っていないが、地震活動は依然として続いており、雄山山頂等の火山活動を含め、各種の観測を強化して監視を続ける必要がある。